

第21号

1983年12月5日
(毎月1回5日発行)

400円

ポーランド月報

「連帯」か政治綱領か A・ティモフスキ	2
「12月」から「8月」へ インタビュー	7
B・ボルセヴィチ／B・ヴィシコフスキ	
分析と展望(中) A・ミニク	14
KORの4人 起訴状と抗議声明	20
ノーベル平和賞について 暫定調整委員会	13
ポーランド日誌	23



「連帯」か政治綱領か？

アンジェイ・ティモフスキ

Andrzej Tymowski, Solidarity or a Political Program?

"POLAND WATCH", No3, 1983 Spring - Summer, pp. 95 - 108

【編集部注】アメリカで発行されている英文ポーランド情報誌『ポーランド・ウォッチ』(季刊)近着号から、1982年秋以降の「連帯」内部論争を整理した論文を紹介する。著者アンジェイ・ティモフスキの経歴その他は未詳である。

〔訳：水谷 駿〕

1981年12月13日の戒厳令に抗議して始まった抵抗運動は、「連帯」のそれまでの法的地位の全面的回復を一致して要求した。この地下運動と「連帯」の間には、「連帯」と政府の間の一時的妥協、すなわち政府に対し基本的な政治的保障を与えるかわりに社会運動としての「連帯」の一定の独立性を獲取った妥協を地下運動が受け入れたという意味で連続性があった。しかし、戒厳令の1年半の間に「連帯」の戦術と目標に関する内部的一致は、闘争方法とその背後の政治的原理に関する内部的批判に道をゆずった。「地下連帯」として始まった抵抗運動は今日、政治的にはきわめて多様化している。

「連帯」と「抵抗運動」の間の連続性

1981年12月には「抵抗運動」と「連帯」の間には明白な連続性があった。街頭で戒厳令に抗議した人々は、大多数が攻撃に対して自らの組織を防衛する組合員とその支持者たちであった。「連帯」の公然活動の期間に組合事務所や工場組織、検閲を受けない出版物などで共に働いてきた活動家たちが、今やその個人的なつながりと実践的技術を活かして軍政に対する反対行動を組織した。

逮捕を免がれた著名な活動家たち（グダンスクのボグダン・リスやワルシャワのズビグニエフ・ヤナスラ）は、この過程で積極的な役割を果たし、抵抗闘争を「地下連帯」として明確化させていった¹⁾。地下新聞に発表された彼らの書簡は、治安機関がかつてそう見えたほど全能でないことを具体的に証明し、大衆の抵抗の意志を支えた。また彼らの名前は匿名の地下出版物に信用を与えるものであった。

地下新聞は「連帯」の公然活動期との結合環となった。それは「連帯」の活力源であった情報網に従って組織されたからである。最初の一連の地下出版物のタイトルそれ自体、連続性をほうふつとさせた。その多くは特定地域の「連帯」グループないしストライキ委員会の『情報プレティン』と名付けられた。当局による通信の遮断後、この情報網は一層決定的なものとなった。地下新聞は、抗議行動を報道し、拘留者および自由の身の活動家のリストを発表し、現情勢に関する分析や政府の最終的意図——「連帯」を根絶しようとしているのか、それとも体制にとり受け入れ可能な形で復活させるのか——に関する推測を載せた。

インクや用品、代金、印刷物などの流通体制が確立されるにつれ、往復のコミュニケーション・ルートが形成された。噂は確認なし否認され、きたるべきデモのニュースが拝められ、提起された戦術の有効性について意見が交換された。厳しい外出制限が小人数の私的な集まりさえ不可能とし、公然集会にいたっては論外としていたため、分析と討論はこれら地下紙を介して行われた。

しかし戒厳令後の抵抗とそれ以前の時期を結んだ最も重要な接着剤は、「連帯」が切り拓いた社会運動に参加したという何百万人の共通の経験であった。それはこれに参加したすべての個人史においてまたとない瞬間であった。「独立自治労働組合」の権利をうちたてた妥協の条件は、政治の世界を国家に譲るのとひきかえに、公的生活の他のあらゆる領域——文化と教育、公共福祉、経済組織——における自己決定の自由を認めさせた。多元主義と公開の原則に鼓舞され、導かれて、あらゆる年齢、社会集団、政治信条の人々が自らの

すぐ周りの環境の改善に取り組んだ。文化と芸術の分野では検閲の制約をゆるめることにより、社会生活の面では公的サービスの地方的提供者に対する圧力と自助によって、職場では自主管理を通じて。この共通の経験の記憶は簡単には消せなかった。街頭で「『連帯』万歳！」「『連帯』は今も、過去も、未来も！」と叫んだ人々にとって、戒厳令前の「連帯」の公然活動期は、単に抵抗のための具体的な、誰もが共有しうるシンボルだったにとどまらず、彼らの黄金時代であった。彼らはそこへの復帰を望んだ。

抵抗運動と「連帯」の間のこの自然で疑問の余地のない連続性の基礎には、「特殊ポーランド的」ジレンマへの「連帯」の解答に対する広い支持があった。国民の大半が疎遠で抑圧的と考える政治体制の下で、これに服従することなく、しかも公然たる反乱の中で無益に血を流すことなく、いかにして生きてゆくか？ 「連帯」は受け入れ不可能なこの両極端の中間に立った。その方法は撞着語法を用いて「不斷の圧力を通じた妥協」と呼ぶことができる。この公式の内的矛盾は人民大衆に対し慎重な判断と多大の自己規律を要求した。このために「連帯」は「自己限定革命」と呼ばれた。なぜなら、社会は全体として意識的に社会的目標——市民的自由、経済的自治、下から大衆によつて統制される社会的自治組織の建設など——の追求を決めながら、政府の正統性を掘り崩すその明白な政治的意味合いを公式には放棄したからである。それは本来的に不安定な妥協であったが、眞の社会平和を約束しているようにも見えた。

「連帯」の合法的存在の16ヵ月間、経済危機の深化と交渉ベースの遅きから生じるいずれの側の不満にもかかわらず、この妥協は有効たり続けた。衆目の一致するところ、この妥協の相対的持続を可能としたのはゼネストを発動する「連帯」の力であった。とはいえば全面的な「無期限」ゼネストは現実には1度も実施されなかった。しかし何度かそれがいかにして生じるかをかい聞見せる機会があった。「連帯」はグダンスク工場連合ストライキ委員会の回りに結集した自然発生的争議の結果として結成された——これは全国的に統一されたストライキ行動の第1歩であった。1980年11月と1981年3月、当局側が広く挑発と認められている行動によって交渉中断の脅しをかけてきた時、「連

帯」は4時間の全国「警告スト」を実施して成功を収めた。後者の場合、工場占拠ゼネストの準備もなされた。それは11時間目に中止されたが、「連帯」がこれほどゼネストに接近したことはその後2度となかった。工場占拠は「連帯」が回避困難だと考えていたシナリオ——外国の軍事介入——にストライキ労働者を直面させたはずである。「連帯」の活動家たちは必要とあればその最後の武器ゼネストを行使する決意でしたが、しかしそれはつねに平和的手段、すなわち工業労働者階級の圧倒的多数の参加によって裏付けられた社会の統一と力の実証手段と考えられていた。この受け身の力に直面すれば、当局は交渉に合意する以外に選択の余地はない、と説明された。

「連帯」の合法的存在期間中、こうした諸要素の間にかろうじて均衡が維持されていた。力の自覚は一方における妥協の必要性と他方における交渉に向けた政府に対する圧力の必要性を支える支点であったとはいえ、政府に対する「連帯」の現実の対応を全体として貫いていたのは妥協であった。

不斷の圧力を通じた妥協という「連帯」の公式のこの不安定な均衡は、戒厳令によってその基礎すなわちゼネストの力を奪われて崩壊した。抵抗闘争のスローガンは、1980年にグダンスクで調印された社会的合意を当局が破ったことを激しく非難した。しかし戒厳令のごく初期の段階から「連帯」活動家の大部分は交渉による解決の必要性を強調した。だがこれを現実的な目標とするには、「連帯」のかつての力の少なくとも一部を回復する必要があった。

暫定調整委員会(TKK)

1982年4月暫定調整委員会(TKK)が4つの地方の「連帯」指導者(ワルシャワのズビグニェフ・ブヤク、グダンスクのボグダン・リス、ヴロツワフのヴワディスワフ・フラシニュク、クラクフのヴワディスワフ・ハルデク)によって設立された時、その目標とされたのがこの力の回復であった。戒厳令最初の4ヵ月間、彼らは論文やインタビューの形でそれぞれの個人的見解を表明してきたが、今や彼らの発言の重みはずっと大きくなつた。TKKの声明は4人の一致した見解を表わし、それぞれの見解は各自の地元地方の大衆の気

分を反映していたからである。

TKKは戒厳令の導入によって変化した条件に照らして「連帯」の綱領を解釈した。しかし、公然たる非集中的、自己限定的社会運動という方法と政府の支配から独立した活力にあふれた組織の建設という目標はいずれも、地下活動の特殊な条件に適合させなければならなかつた。

TKKは「連帯」地下指導部の最も公的な組織であったが、その構成員は最初その暫定的性格を強調しなければならなかつた。われわれは必要にせまられて指導的役割を担つたのであって、正当に選ばれた「連帯」構造が機能を再開するまでの間機能し続けるにすぎない——彼らはこう主張した。12月以前の「連帯」と当局の間の公開の対話は今や両者の新聞を通じて発表される声明を通じて行われ、街頭での大衆の反応によって判定されることになった。しかし当局側はTKKを対話の正当な相手とは認めようとしなかつた。1982年5月1日と3日、戒厳令施行後の地下運動に対する最も断固とした支持のデモンストレーションが街頭で展開された時、これに対する当局の唯一の対応はZOMOの大規模な展開であった。7月、TKKが路線を変更して、善意の印として公然たる抗議行動の中止を呼びかけた時も、当局側はこれに応じるのを拒否した。

誰もが知っている人物がもっぱら地下から語り、「自由な」人間は匿名を使うという状況は、TKKと下部大衆の関係にも制約をもたらした。TKKと抵抗運動内部のその批判者との間で展開された綱領と戦術をめぐる議論は1982年夏までにますます先鋭かつとげとげしいものになっていった。活動家の多くが、政府は強制されないかぎり絶対に妥協に同意しないと考え、TKKは幻想でしかない合意を求めてあまりにも時間を浪費しすぎていると非難した。TKKは政府に譲歩を強制できる規律ある運動の組織化にそのエネルギーを注ぐべきである——批判派はこう主張した。

ゼネスト論争

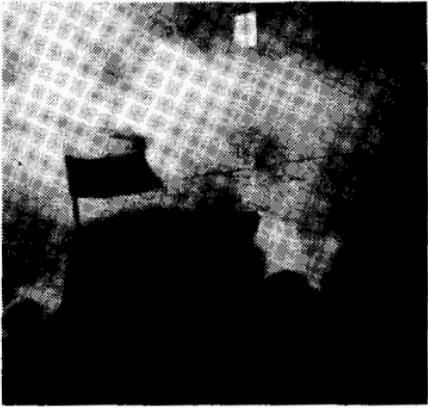
ところが、ゼネストの準備に集中した内部論争はその内的首尾一貫性の欠如を明らかにした。戦略的には、ゼネストの成功は労働者の運動を妥協という当初の目標を越えさせる恐れがあった。積極的防衛を伴う一連の計画的工場占拠——地下新

聞はストをこう表現した——は「勝利までのストライキ」以上のものを意味した。それはストライキ労働者をフルシャワ条約機構全体の全軍事力との対決に投げ込む公然たる反乱となるはずであった。これこそは「連帯」がその全歴史を通じてあれほど慎重に避けようとしてきたシナリオであった。戦術的にはストライキはふたつの矛盾した条件を満たさなければならなかつた。それは当局の不意を打つためには自然発生的であることが必要だったが、同時に、全国の工場労働者の最大限の支持を動員するためには前もって計画されていなければならなかつた。

そのタイミングをめぐっても地下運動内部には対立があった。ある者は、死活をかけた闘争を指導でき、その時がくれば政治権力を掌握できる陰謀的な厳密に中央集権化された中核組織の建設に向けてただちに動くことを望んだ。TKKに指導された他の部分は、「積極的行動」、すなわちもうひとつの社会構造を建設する忍耐強い行動を基礎とした長期的闘争を提案した。²⁾ 1982年7月28日、TKKは綱領的声明、「地下社会」³⁾を発表し、相互扶助の自己組織化、自主教育、独立した新聞、そして街頭デモを呼びかけた。著者たちによればこの綱領は、それ自体として有効であるばかりでなく、活動家の間における抵抗意志の維続を可能とするものだった。

1982年後半の3つのでき事が近い将来ゼネストが可能であるとする期待をついえさせた。第1は「連帯」結成記念日の8月31日の抗議行動の成功であった。TKKの呼びかけに応えて何千という人々が街頭に繰り出した。何十という都市で展開されたデモンストレーションは、地下「連帯」に対する支持を示すには十分であり、TKKが大衆の気持とかけ離れているとする非難に対してTKKを暗に擁護するものであった。しかしこのような劇的な力の誇示さえも、政府に戒厳令を撤回させるにはおよそ不十分であった。

第2のでき事は10月8日の「連帯」の正式の非法化である。戒厳令の施行によって「連帯」は事実上非法化されていたとはいえ、法的には他の組合と同じく活動停止とされていただけであった。それゆえにこそ地下運動はその復活のための交渉を目標とすることができた。「連帯」を公式に解体することによって政府当局は、交渉の可能



1981年8月31日 グダンスク。

性を拒否できるほど強力に事態を掌握していることを宣言したのであった。

第3のできごとは、TKKが11月10日に呼びかけていた1日ゼネストの失敗であった。それは翌春のさらに周到に計画されたゼネストの前奏曲となるはずだった。この11月ストは前もって呼びかけられていたものであったがゆえに、政府は予防的措置をお膳立てする十分な時間があった。1人1人の労働者の家を警官が訪問し、マスコミは不法行為に参加した者すべてに生じる重大な結果を警告する声明を伝えた。11月8日、グレンブル大司教がヤルゼルスキ将軍と会見し、ローマ法王のボーランド訪問計画が発表された。そこには、社会的混乱はこの訪問の実現を危うくするという明白な含みがあった。11月10日、ワルシャワなどで散發的なデモがあったが、ゼネストは実現しなかった。

地下活動の1年の反省

政府当局は以上一連のでき事を反対派鎮圧のとどめの一撃として有効に活用した。そして11月末、政府がこれに成功したことが強く主張された。「連帯」は公的生活から驅逐されたばかりでなく、その「究極の武器」、ゼネストの発動に失敗し、反対派は全体として教会と政府の取引きによって出し抜かれたように見えた。

活動家の多くは1982年後半のゼネスト戦略の失敗を抵抗運動の転換点と見た。もちろん彼らは、これ以上の抵抗は無益だという政府の結論には絶

対同意しようしなかった。しかし今後の戦略をたてるにあたり、地下の活動家たちはこの1年間の成否を真剣に評価検討した。ある者は「連帯」の労働組合としての形式の放棄が必要であると主張し、ある者はTKKの戦術的誤りを非難し、またある者は今後における「連帯」の自己限定原則の有効性に疑問を投げかけた。さらに他の人々は、政府の正常化計画を挫折させる必要性から抵抗精神の持続を可能とする「地下社会」の考え方を擁護した。

「11月10日のストライキとデモの経過は、迅速な勝利の希望が、自己限定的革命の希望がついえきってしまったことを示している。……たしかに政府が自前の組合を作るのは不可能である。しかしそれは労働組合としての『連帯』を巧みに麻痺させた」。『ティゴドニク・マゾフシェ』第35号〔『パリ「連帯」通信』第52号〕に発表された論文、「敗北と勝利の間」でマチエイ・ポレスキがこう述べている。彼は、「連帯」の真価はそれが政党あるいは狭い意味での労働組合ではなく、「社会全体の自立的運動」であったことにあると結論した。それゆえにそれは、何らかのタイプの共産主義との歴史的妥協を追求すべきではなく、共産主義者の足下から1歩1歩地盤を取り除いてゆく明確な綱領に従って進むべきである、と彼は言う。

12月13日以来地下にあるグダンスク選出の「連帯」幹部（KORのメンバーでもある）、ボグダン・ボルセヴィチもTKKの戦術を批判する。TKKはもっと大胆に、自然発生的で散発的なエネルギーの爆発をより効果的な反対行動にまとめあげるべきであった。この1年は成功だったかと問われて彼はただ「わからない」と答えたが、しかし彼はTKKが提案する「地下社会」のような長期戦略には賛成しない。彼によれば、地下運動の綱領は永遠に警察の探知を避ける能力に基礎を置くべきではない。いずれにせよ、地下活動家が遅かれ早かれ大衆の気持との接触を失い、「その声を聞く」ことをやめるのは不可避である〔同上〕。

ワルシャワとカトヴィツェで発行されている月刊誌『ニエボドレグウォシチ』（独立の意）は、共産主義反対、独立賛成の政治的立場からの分析を発表している。その1982年10月号の論文、「冬の前」は、TKKの特定の戦術的誤りの原因を「連帯」の合法的存在期間中の優柔不断に求めている。

合法組織としての「連帯」には2つの選択が可能であった。事実上の二重権力状態を利用して独自にもうひとつの権力構造を作りあげるか、あるいは「今度もまた」政府が「戦争でもなく平和でもない」状態を許容し、軍事的解決には訴えないだろうという期待の下に何もしないで待つか、である。編者たちによれば、「連帯」は後者を選び、12月13日の諸結果を招いた。「積極的ストライキや経済に対する支配権の共産党からの奪取について」は多くの議論がなされたが、しかし「連帯」はついに「中心的な問題、あらゆる行動の基礎——政治権力の奪取」を直視しなかった。編者たちは彼らの最も辛らつな攻撃を、今も戒厳令の赤裸な教訓を受け入れることを拒否し、政府との妥協を呼びかけ続けている「連帯」活動家たち（ブヤクが名指しされていた）に向かって。論文は「連帯」地下指導部（「とりわけワルシャワ執行委員会の言語道断な振舞い」）が10月8日の「連帯」非合法化後のまたとない好機を逃がし、行動に起つたなかったことを口をきわめて攻撃した。大衆は起つ用意があったが指導部が押し止めた。この失敗において果した役割のゆえに、「ブヤクはその友人を変えるか、肩書きを変えなければならない」。

この批判に対するブヤクの回答は、ワルシャワで発行されている『ティゴドニク・マゾフシェ』に発表された「一年間の回顧」というインタビューの中に与えられている。彼は言う。「連帯」はクーデタの前も後も歴史的視野に置いて判断されなければならない。将来の行動のための綱領は、「政府打倒の武装反乱」ではなく、政府との何らかの合意を求める「公然」かつ「建設的」な行動を目標とした長期戦略のために抵抗社会を準備するよう構想されなければならない。

ポーランドの状況を1956年のハンガリーおよび1968年のチェコスロバキアと比較して、ブヤクは、「連帯」が12月13日に対して自衛に成功するには、あらかじめ軍事的準備をしておかねばならなかったと指摘する。しかし開かれた労働組合運動としてのその構造がこのような可能性を排除していた。その上忘れてはならないのは、武装抵抗はハンガリーでは成功せず、またハンガリーでもチェコスロバキアでも当局は反対派の拠点をすべて根絶できたという事実である。このことはまず確実にポーランドにはあてはまらない。ここで

は忠誠宣言の圧力さえ比較的早くひっ込められた。ブヤクは指摘する——過去1年間に登場したもうひとつの社会は、御用組合や体制主導の社会団体や芸術家団体といった政府の平定手段に対し、自らを防衛してきた。

「連帯」の地下活動はポーランドを越えて、とりわけ他の東ヨーロッパ諸国に対して影響を及ぼし続けている——こうブヤクは主張する。ただしこの影響の正確な度合いを測定するのは困難である。西側世界さえ、ポーランドが全体主義的体制に対する抵抗に成功しているという事実に感動している。

TKKは非効率的だという批判に対しブヤクは、それは第2次大戦中の国内軍（AK）による対ナチス抵抗闘争をモデルとした抵抗組織を期待するからであると答える。ふたつの歴史的状況はまったく比較不可能である。国内軍は以前から存在した軍事機構に依拠できた。ところが「連帯」は非集権的な労働組合であって、指揮命令機構を持たず、「働きたい人が働く」という原則にのっとって機能してきた、と。

〔以下次号〕

〔訳注〕

- 1) たとえば、Z・ヤナス、「『連帯』全活動家諸君へ」（『ポーランド月報』第2号、1982年3月25日、所収）を参照。
- 2) こうした一連の論争については、『ポーランド月報』第3～7号の各論文、および『ポーランド不屈の「連帯」』（ポーランド資料センター編、柘植書房）113頁以下を参照。
- 3) 全文は、上掲『不屈の「連帯」』92～96頁。
- 4) Z・ブヤク、「戒厳令下1年間の活動」、『ポーランド月報』第12号、1983年2月28日、所収。



「12月」から「8月」へ

インタビュー：ボグダン・ポルセヴィチ
ブワジェイ・ヴィシコフスキ
聞きて：マリウシュ・ムスカト

Grudzień przed Sierpieniem

Bogdan Borusewicz, Błażej Wyszkowski

Rozmawiał: Mariusz Muskat

【編集部から】 80年8月の「21項目要求」の1つに70年12月事件で倒れた犠牲者の記念碑建立があったことはよく知られている。「12月」はポーランドの労働者が、われわれはまちがっていない、とめらうことなく正当性を主張できる事件であった。それはまた、権力側にとっては触れたくない傷だった。「8月」の炎火を切ったグダンスク造船所の労働者を一貫して突き動かしていた力は、この正当性の白負、あるいは——言葉をかえれば——「12月」の犠牲者を追悼する心であったと言えよう。その心を最初に形にして表現した人々の話を紹介する。

「震源はいまも脈動している」

——ヤツェク・カチマルスキ

11月のある日の午後。今年〔1981年〕の冬はじめての吹雪をついてわれわれはコシチジナ〔グダンスク県カシブイ湖沼地帯〕の町のはずれにある、レヨン・ドルク工場の労働者たちが住む2階建に向かう。まっ暗だ——停電は3時間はつづくだろう。ボグダン・ポルセヴィチ（廃棄持ちの地域活動家）とブワジェイ・ヴィシコフスキを職場委員会の会合の場に見つけ出す。冬に備えて薪のストックについて、ポーランド語とカシブイ語半々で、議論を交わしている男たちの顔がかろうじて見分けられる。われわれはどうしてもここに来る必要があった。ブワジェイを抜きにして「12月」の追悼式のことをどうして語れよう。77年を私はよく覚えている——最後のどたん場でわれわれは造船所から何百ズロティもの募金をあつめた、まだ数10本も花を（赤いシクラメン）買う必要があったのだ。われわれは第2ゲートそばで行われる追悼式を知らせるビラを、道々、配りながら第2ゲートへ急いだ。ブワジェイが花輪を持ってくるはずだったのだ……。

ろうそくが灯る——おかげでメモがとれるようになる。人生のほんの数コマのフィルムを現像す

るのにわれわれは2時間もかける、その数コマの背後には無数の記憶がある。

——71年を覚えているだろうか、メーデーのことだが。

ブワジェイ・ヴィシコフスキ そのころ私はここにいなかった。グダンスクの大学に入ったとき、上級生に尋ねてみたのだが、かれらも正確な話はまるでできなかった。「12月」のおかげでもらった特別休暇でかれらは満足している、そんなふうに見えた。

当時、私はルブリンの大学にいた。「ヴィエチュル・ヴィヴェジェジャ」「バルト海沿岸地方の夕刊紙」の公式記事を覚えている。グダンスク造船所の所長といいくつかの社会団体が〔造船所の〕壁に花輪を飾り、労働者の方は、責任者の処罰と記念碑の建立を要求する横幕をかかげて官製のメーデー行進を行った、記事にはそうあった。

——そのあと、記念行事は禁止された。ところが……また行われるようになる。いつからのことだろう。

ボグダン・ポルセヴィチ 76年のザドゥシキ〔11月1日カトリックの方聖節〕に学生グループ（のちのポーランド青年運動RMP——メンバーは、

アルカディウシュ・リビツキ、アレクサンデル・ハル、ヴォイチェフ・サモリンスキ)がグダンスク造船所の第2ゲートでろうそくを灯し、花をそなえた。夜になって私はグディニャへ出かけ、その造船所前の「死の橋」と市議会前で同じことをした。そのころ私はまだKORのメンバーではなかった。恐かった。門の中にあわててとびこんでしまったが、私をつけまわしたり、つかまえようとする人間はいなかった。

77年のメーデーで、いま言った学生グループは神学職司祭のスロカ神父と協力してグダンスク造船所のゲートに「戦いたわれた造船所労働者へ——学生から」と書いたリボンをつけて花輪をそなえた。学生は30人ほどいた、午後2時ごろのことだ。花輪はあまり目立たなかった。それが置かれていたのはせいぜい5分くらいだった。当局が動き始めていたからだ。われわれが立っていたあたりにはそれより前からかなりの数の聳官がいた。もっともわれわれはつかまらなかったが……。

この追悼式のあと、われわれは1つの結論に達した、つまり、社会的反響のない行動を組織しても何の意味もないということだ。それでわれわれは12月に、造船所労働者が街頭へ出たのと同じ時間に追悼式を行うことに決めた。仲間は77年にはかなりの数になっていた。そのうちの1人がブワジェイだ。彼はすでにこの運動をはじめていて、KORのコミュニケで私の住所を知り〔KORの文書にはメンバーの住所も明記されていた〕、すぐに私のところへやって来た。

——街頭行動ばかりしていて墓参りもしない、と非難されていたのを覚えているが、実際はどうだったのか。

ヴィシコフスキ 77年から毎年、われわれは12月事件の犠牲者の墓に花をそなえてきた。もちろん私たちの知りうる限りの、つまり、グディニャのやく12の墓とソボトの1つだが。それはいつも決まって11月1日だった。なるべく目立つように大勢で墓参りをした。花は赤と白のものを使い、それには例のリボンをついた。公安〔S B〕が見張っていたが、ただ見ているだけだった。墓地でわれわれは殺された人々の家族と会った。はじめての年、かれらはびっくりし、感激してくれた。あるボイスカウトの墓を覚えているが、それはおもでの目立つ場所にあって、銘板にはとても大

きなろうそくがそなえてあった。ここで大勢の人たちが足を止めた。この墓が何を意味するのか、みんなが知っていたのだ。あとでそこは象徴的な場所になった。こんなにも若い人間が殺されたということに私は驚いた。そのなかの2人はようやく15歳になつたばかりだったのだ。

——77年12月。恐怖の障壁がはじめて、本当にとりはらわれた。そう言えると思うが。

ボルセヴィチ たぶん、そうだ。そのころにはもう、湾岸3市〔グダンスク、グディニャ、ソボト〕の大学学生連帯委員会〔SKS〕が活動を始めていた。これは前にふれた活動家グループ——ブワジェイが参加していたグループだ——が発展したものだった。私も10数人の学習会を組織できた。おもに〔グダンスク〕工科大学の学生たちだ。そのなかで最も積極的だったのが、スタシェク・シミエギエル、アンテク・メンジドウォ、アンジェイ・ステファニヤク。われわれは追悼式を知らせる小さなビラを何百枚か作って(これはリビツキ兄弟がタイプライターで打ってくれた)町中に張り、さらにスクリーン印刷でもっと大きいものも作った。官製ではない印刷所がすでによちよち歩きを始めたわけだ。

——準備は学生だけでやったのか。

ボルセヴィチ 大多数は学生だった。しかし当時すでにヨアンナとアンジェイのゲザイアズダ夫妻もいたし、ROPCIO〔人権市民権擁護運動〕の人たちも入っていた。湾岸3市SKSの若者たち、たとえば、タデウシュ・シチュドウォフスキとかヤン・サムソノヴィチとかはこのROPCIOで活動していた。79年にはレシェク・モチュルスキ〔独立ポーランド同盟KPNの主要メンバー〕もやって来たが、逮捕されてしまった。リボン付きの花輪(書きつけた言葉はメーデーのときと同じだ)を作る費用はそのほとんどを学生たちから集めた。募金をはじめに提唱したのは造船所の労働者たちだったのだが、そのうちに彼ら自身かなり苦しくなり、われわれにはあまり援助してもらえないようになった。

——権力に反対する行動としてはどんな試みがあったのか。

ヴィシコフスキ むしろ何もなかったと言った方がいい、せいぜい〔グダンスク〕造船所のそばで秘密警察のまさしく大集団と出くわしたくらい

だろう。連中はすぐ見分けがついた、前からわれわれをつけまわしていたのだから当然だが。われわれは拘留されることはなかったが、町では花輪を持って墓地へ行こうとしていた人たちがかなりつかまつた。私の花輪は自宅の地下室にしまつてあった。しかし家は見張られていた、そこで、朝早く私は出かけた、見張りの大部分を「お伴」に連れてね。そのあいだに仲間が私の家に行って花輪を持ち出して、タクシーで、安全に、環状線をまわって指定通りの時間きっかりに造船所までもって來た。

そのころ、われわれはドカ通りとワギエヴィニ通りの交わる角にいた、全部で10人少々だ。そこから造船所ゲートへ向かった。秘密警察の一隊がわれわれを労働者たちに近づけまいとして行く手をさえぎりにかかったが、結局は道をあけた。なにしろわれわれは断固としてまっすぐに進むだけだったし、道のカーブの向こうからは追悼式に参加する人たちが10数人、姿を見せていたのだから。追悼式のビラ貼りは効果があった。われわれの行く手を妨害しようとした連中はこう言った——「おまえらは静かに働くとする人間の邪魔をしている」（もう仕事時間は過ぎていたのだが）。連中はひどく汚ないことをした。造船所の壁は10数台のバスと、ふだんはそこを通るはずのない市電まで動員して封鎖されていたのだ。

ボルセヴィチ 造船所の労働者が仕事を終えて出てくる時間だった。かれらは花輪を目にするとき帽子をとった。われわれはバスの列の前を通った、それはわれわれを広場から切り離していた（それ

が目的だったのだ）。壁の前にはかなりの数の乗用車が駐車していた。なんとかすき間を見つけ、花輪を置いた。ひどいぬかるみだった。ろうそくに灯をともし、花をそなえた。ふと気がつくと、われわれのまったく知らない、われわれの仲間ではない人たちも同じようにしていた。われわれが壁に近づくと拍手がひびき、どこかのおばあさんが大声で言った——亡くなった人をうやまう人間がやっと出てきたよ……。私は数百人の群衆に向かって、案内人のような調子で挨拶をしてから聖歌をうたい出した。そのとき、「墓地へ行け」という声が聞こえた。妨害しようとしたのだろう。聖歌をうたいながら気がついたのだが、群衆のなかに帽子をとらないのがいた。秘密警察を見つけるのにはたいへん好都合だった。

献血のあと、われわれはほかの人たちの邪魔にならないよう、壁をはなれ、広場へ向かった。バスが（お客はまったく乗っていなかった）ひっきりなしに走り過ぎ、壁に近づいたり、花輪が撮影されないように妨害していた。カメラマンたちはそのあと、町へ出てから引き止められ、フィルムを没収されであれこれ尋問された。さいわいに写真がすべて失われたわけではない。まず、映画のフィルムが残されている。撮影後、ただちに手際よくカメラから抜かれたこのフィルムは、その後の数多くの家宅捜索にもかかわらず守りぬかれ、やがて、当時を物語る確かなドキュメント・フィルムの一部分になった。公安は大規模なカメラ狩りを行った。午後3時ごろのことだ。グダンスクのど真ん中。連中はわれわれをごろつきと同じ手



レーニン造船所第2ゲート 80年8月

口で囁いた。車で行手をさえぎり、引き倒し、ついにブワジェイのカメラをもぎとつ……「泥棒だ、つかまえてくれ」学生たちは追いかけた。グダンスクの住人たちはなにが何だかまるで見当もつかず、逃げてゆく秘密警察の一隊を眺めていた。

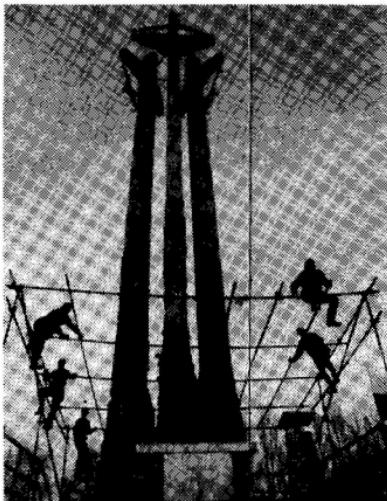
われわれはすぐに警察署へ行き、被害届を出した。われわれは夜遅くまで、拘留とも証人ともつかない形でそこに足止めされた。警察の態度にはフィルムをとりあげてしまいたいという気持が見えみえだった。ひどくばかげた状況だった。2ヶ月後、結局、カメラは戻って来た。しかしレンズが全部なくなっていた。つまり、カメラが連中の役に立たなかったので、少しばかり仕返しをしてやれ、そんなふうに考えたのだろう。

ばかげたことがもう1つ、いや、正確には2つある。1つが、造船所から3人の人物が私のところにやって来て、追悼式をやめろと脅したこと。「訪問団」の団長というのが、党活動家のマズルキエヴィチだった。それと、追悼式のあとのことだ、ボジエナ・リビツカが、追悼式の告示を貼ったとして違法行為審判所〔略式裁判を行う、管轄は県知事〕で5000ズウォティの罰金を言い渡された。われわれは県知事あてに不服申立てを行い、罰金刑は12月事件の公式解釈を変更するものだと強調しておいた。返事はなかった。

悲しい事件も起きた。われわれが花輪をそなえたのは12月16日だった——造船所から静かに出て来た労働者たちに一斉射撃が加えられたちょうど同じ日付だ。造船所の「アクティブ」はきっと、記念日が終わっていくらかほっとしていたのだろう。工場委員会の執行部メンバーの1人が夕方の帰宅途中、北造船所ゲート前にいたズイグムント・キエディシュを撃いてしまった。運転をしていた「アクティブ」は酔っぱらっていた——検査の結果、血液中のアルコール濃度は2.55パーセンツもあった。彼が逮捕されたのは1ヶ月もたってからだった、それも、この事件についてのKORの文書をわれわれが広めてからのことだ。ズイグムント・キエディシュは死んだ。

——どれくらいの時間、花輪は置かれていたのか。

ヴィシコフスキ やく1時間。それで十分成功だった。



七〇年事件記念碑

——今度は78年のことを。

ヴィシコフスキ 78年は予防拘禁だった。私もつかまり、有名なビヤワ通りの警察署へ連行された。私の弟のクシシェフ、それに、ハル、ザホルニク、シチュドウォフスキ、ほかに数人が一諸だった。われわれは独房越しに大声で話しあったが、看守はとりたてて干渉はしなかった。状況の異常を感じていたのだろう。午後2時20分、われわれ全員が聖歌をうたった。尋問されている間に、ボグダン〔ボルセヴィチ〕はつかまらなかったらしいとわかった。このことはわれわれを励ましたくれた。

——ボグダン、逮捕をどうやってのがれたのか話してくれないか。

ボルセヴィチ まず追悼式の準備のことから話そう。その年はもう、活動の比重が自由労組設立委員会〔KZWZ〕の方にかかっていた。この委員会はROPCIOが5月3日〔1791年の憲法記念日〕と11月11日〔独立記念日——第2共和制ポーランドの誕生。1918年〕の記念式を組織してゆくうちに生まれたものだったが、われわれもその手助けをしていた。追悼式のビラは小さいものをやく3000、大きいのは500作った。印刷はスクリーン印刷で（警察が聞き耳を立てていたにもかかわらず）私の自宅でやった。われわれは簡単な方法をとって、コップのたぐいをがちゃがちゃさせて印刷の音を消した。ビラはグダンスク造船所構

内にも貼ったが、すぐにはがしてしまうような人間はあまりいなかった。

一方、町ではわれわれを取り巻く雰囲気が厳しくなってきた。警官の特別班がビラをはがして回り、かなりの数の警官隊が投入されて、造船所に向かう道の封鎖計画と町の重要拠点を監視する哨所の配置計画が立てられた。このときの県知事は12月13日に行政命令を出し、12月15日から31日までのあいだに違法行為審判所で行われる訴訟手続の迅速化を指示した。その対象として挙げられた違法行為というのが、群衆による道路占拠、およびその指揮、交通の阻止、妨害、などなど。違反項目として挙げられたのは16、ただそのうち2つは追悼式とは関係がなかった。

12月17日、日曜日。追悼式の前日だった。公安警察〔S B〕の數10隊（10何人かずつで1隊）が一斉に検問と拘留を開始した。16人が48時間拘留、取調べを受けたのは25人。検問は12月18日の明け方6時ごろまで続けられた。いわゆる「大なべ」方式だ。さいわい、われわれの一部はそれをあらかじめ予測していた。私もその1人だった。ところが、ムイシク——公安のスパイが自由労組設立委員会メンバーにもぐりこんでいたのだ——がわれわれの居場所を知っていた。そんなわけで、もちろん、私の家の前には見張りがいた。それを見つけてくれたのが、私の住んでいたザスバ地区に自宅を持っている人たちだった。秘密警察が2人、アパートの入口の中から外をうかがい、あと1人が階段の上の方を見張っていた。私は部屋を出て上へ向かい、階段と階段を結ぶロビーに入って、それから、自分の部屋へ行くふりをして後手にドアを閉めた。屋根裏にいた刑事は気づかなかった——おそらく、私がすっかり変装して、大きな眼鏡までかけていたせいだろう。

やすやすともう1つの階段を使っておもてに出て、建物と建物のあいだを通り抜け、あちこちの検問拠点に止まっている公安の自動車をどうにか避けることができた。そのあとは走ったり、埠を乗り越えたり……みごと切り抜けた。花輪を受けとり、あとはタクシーで造船所まで行こうとした。ヤン・ス・コルナ通りから先は交通止めだった。そこで私はタクシーの運転手に、追悼式の花輪を持ってゆくところだと打ち明けた。タクシーはビヤストフスキエ提防の方を回って、バスのあとに

ついて進み、なんとかもぐりこめた。造船所に持ちこめたのは私の花輪だけだった、全部で5つ用意したのだが。

その日あつたのは（やく2000人）ほとんどが造船所の人たちだった。これまで学生を中心だったのだから、当然、追悼式の性格も変わってしまった。一定の距離をおいて警察のパトロールがいた。やく40人。それも午後2時ごろには引き上げた。演説のできる人間を入れなければそれでよかっただろう。ふつうの墓参するために花輪を買って足止めをくった人々は、取調べのあと墓地まで護送されていった。群集の中は模範的な規律が確立していた。1年前と同じ目的で集められたバスが、今度は演説の声をかきけそうとしてエンジンをかけていた。壁の外の小屋から公安が集まつた人々を撮影していた。もう1台、カメラが街灯の柱にとりつけられていた。午後2時20分、まだ花輪は1つも到着しない。そこで労働者たちは自分たちで花をそなえることにした。集まつた人々は「1970年12月」という悲しみの文字を書き入れた国旗をかかげて壁の方へ進み出した。聖歌をうたい、殺された人々に1分間の黙祷をささげた。

マグダ・モゼレフスカとアーニヤ・ムウニクが、検問で花輪はおそらく没収されるだろうと知らせ、静かに解散するように呼びかけた。やく500人が帰っていった。そのとき、ROPCIOのダリウシュ・コブズディイがカジミェシュ・シフィトンの獄中からの手紙を読みあげた。「シフィトンに自由を」という声があがり、人々はその場に踏みとどまつた。1970年のストライキ委員会のメンバーだったカジミェシュ・ショウォフが演説した。私が花輪を持って到着したのはそのときだった。私は12月の悲劇の教訓と自由労組の活動についておもに語った。そのあと、インターナショナルと「神よ、ポーランドに」が歌われた。叫び声が聞こえた——「われわれは自由がほしい、赤いブルジョアは出てゆけ」。新聞に対しても非難の声があった。われわれはおたがいの住所をタバコやマッチの箱に書き合つた。群集は演説をした人たちを送つて行こうと言つた、そしてあるグループは、公安の攻撃を恐れる主催者の抗議を無視して実際に駅まで送つていった。午後4時、すでに30~40人くらいしか残つていなかつた。そこへ「ニサ」

〔マイクロバスの名〕がやって来て花輪を持ち去った。人々は抗議し、ののしったが無視された。

2日後、釈放された自由労組の活動家たち（ピエンコフスカ、ヴァウェンサ、ブルツ、アンジェイ・グヴィヤズダ）が、あらかじめ用意してあった「1970年ストライキ委員会」からの花輪をそなえようとした。かれらは造船所そばで公安の野蛮な襲撃を受けた。ピエンコフスカは両腕をねじあげられ、車に連れこまれた、男たちは彼女を救い出そうとしたが、同じ日にあった。そのあとすぐ私も逮捕され、仲間たちと一緒に「ニサ」で警察署まで連行されていった。途中、われわれは大声で歌い出した。「歌う護送車」は、歌声がほかの人々に聞かれないように、車道のまん中を走った。それほど連中の恐怖は強かった。昔の記憶をすっかり塗りつぶしたかったのだ。2日後、ヴァウェンサは警察からまっすぐ違法行為審判所へ回された。そこで5000ズウォティの罰金……不良行為だそうだ。

79年にも、記念日の2日後に釈放されたA・コウォジェイとA・ブトキエヴィチが花をそなえた。

——79年12月はあなた方ふたりは予防逮捕された。

ボルセヴィチ 予防拘禁よりもひどかった。ROP C i Oのアンジェイ・チュマとアンテク・マチエヴィチ〔KORメンバー、雑誌「グウォス」編集長〕がワルシャワでも12月の追悼式をやろうと準備していた。そこへ逮捕と検察の弾圧が襲った。私はパンツでワルシャワまで時速100キロで運ばれた。車を降りたのは9時間後、追悼式は終わっていた。

——ブワジェイの方は？

ヴィシコフスキ 道路整備の仕事をしていた。記念日の前日、レンボルク〔グダンスク県〕の方から車で帰って来る途中のことだ。ヴェイヘロヴォの手前でわれわれの車を黒いパンツが追い越し、なにやらギャング映画みたいにして前をふさいだ。同時に横手もふさがれた、たぶん軍用の救急車だ。ユーターをさせないためだったろう。私はパンツに乗せられ、それから猛烈なスピードでグダンスクに向かってとばした。自宅を捜索されながら、私はブルシチへ移された。

ボルセヴィチ ブワジェイがこわかったんだ、だからブルシチへ移したのだろう。ブワジェイは

大胆でしっかりしていた、やるべきときには断固としてやったから。それに、79年の刑務所は12月関係の逮捕者でひどいぎゅう詰めだったし。警察と公安の動員は78年のときより大規模だった。アンジェイ・グヴィヤズダやアンナ・ヴァレンティヴィチのように、仕事場から引っぱられた人もいる。グヴィヤズダは逃げようとしたが、結局、つかまってしまった。

——すると、無事だったのは誰か。

ボルセヴィチ マリラ・ブウォンスカ、自由労組の活動をしていたまだ若い女の子だ。彼女はまったく他人の援助で警察の執拗な手入れから逃げられた。その人たちのところで1日中かくれていたのだ。かくまってくれた人たちは、隣人の助けを借りて警察の見張りをずっと監視していた。警察は結局あきらめた。マリラがもうその家にはいないと思ったのだろう。演説すべき内容は自由労組の活動全員が書きとめてあった。マリラもだ。それを彼女は、12月18日、造船所前に集まった群衆（およそ5000人いた）の前で読みあげた。2番目の演説はレフ・ヴァウェンサだった。「エレクトロモンタシュ」の仲間たちが、警察の大がかりな手入れ（犬も使った）をかわして工場から連れ出して來たのだ。レフはそのとき、来年は記念碑が立つだろう。もしかするとそれは石を積みあげたものになるかもしれないが、と言った。彼の言った通りになった。もっとも、それはみんなが持ち寄った石でできたものではなかった、勝利の記念碑になったのだ。しかし、80年の追悼式はもう労働者だけのものではなかった、社会的になっていたのだ。

——ほかに誰か演説を？

ボルセヴィチ ROP C i Oに関係していた神学職司教のスロカ神父がした。そのころ彼はもうグダンスクでは仕事をしていなかった。〔グダンスクの〕司教が彼を「不正な考え方の若者たち」と関係を持ったとして解任したからだ。それ以前にもL・ヴィシニエフスキ神父がルブリンへ左遷されている。80年〔12月16日の記念碑除幕式〕にはその同じ司教が演説に立った、だから、スロカやわれわれのような人間に出来がないのは当然だった。われわれは追悼式のやり方を国家=教会風にする気はなかった。あのとき〔1980年〕には組合〔『連帯』〕までもが陰に追いやられた。ヴァ

ウェンサの演説にしてもそうだ、実際には「12月」に触れていない。県第一書記のフィッシュバフの方がそのことをより多く語っているほどだ。

——そう。われわれはレフ〔ヴァウエンサ〕がどのような演説をするか楽しみにしていた。あの日の演説は、将来は学校で市民教育の主題になるはずだったのだ。われわれはひどく失望した。

ボルセヴィチ 76年以降、教会は「12月」ミサを行ってきた。このことにも触れないとグダンスクの教会に対して公正さを欠くことになる。ヤヌタク神父の名は挙げておくべきだ。彼はグディニャの教区司祭で、人間の尊厳と市民権の偉大な代弁者だった。そのせいでグディニャは教区の管轄を移されることになったのだから。

——80年の式典をどう思うか。周囲をぎっしりと警官隊に囲まれて行われたあの追悼式を。最初に追悼の行動を始めた人たちにはまるっきり敬意が払われなかつたのだが。

ヴィシコフスキ そのこと自体は重要ではない。「8月」以前、追悼式を行うことは無条件にわれわれの義務だと感じていた。しかし、80年に感じたのはただ喜びだけだった——みんなが恐れることなく集まって来られるのだと。

ボルセヴィチ 義務感だけではなかった。精神的な障壁を破壊することでもあった。われわれにとってだけではない、傍観者にとってもそうだ。きっぱりと頭を上げて立ち上ることは可能なのだと知って、人々は不意をつかれた思いをしたのだ。一方、われわれは活動（おもに自由労組の考え方の普及）を拡大する基盤を手にできた。「12

月」は政府にとって急所だった。そのことがまた、われわれを大胆にさせた。政府に残された選択の道は、戦術的につじつまの合う、と同時に、道義にかなつた式典を自分たちの方で組織することだけだった。しかし、そのためには政府が真に道義にかなつた存在となり、想像力を持たなければならなかつたのだ。ところが政府の選択は公安警察を信頼することだった。政府は手のこんだ方法をとり、たくさんのスパイを使った、にもかかわらず成果はあがらなかつた。盗聴に対してもわれわれは打つべき手があった——「作戦」の詳細をカードに書いておくとか……。

——もう8時になる。駅まで走ることになりそうだな。そろそろ終わりにしたいのだが。

ボルセヴィチ バルト海沿岸地方に残る「12月」の記憶は常に強く激しいものだった。ただ、それはこれまで眠っていた。それをわが国の環境が目覚めさせ、またたく間に大きな動きに成長させたのだ。

ヴィシコフスキ この動きはこのさきも長くづく……。

風はあいかわらず強い。われわれはそそくさと出発する。戸口でふと振り向かざるをえない気持になる……ろうそくがまだ灯っていた。

マリウシュ・ムスカト

[週刊『連帯』第37号 1981年12月11日付
訳：篠崎誠 -]

ノーベル平和賞について

1983年10月5日

「連帯」暫定調整委員会

本年のノーベル平和賞が独立自治労働組合「連帯」委員長レフ・ワレサに授与されたというニュースをわれわれは満足して迎える。ノーベル賞委員会のこの決定は、今日までのレフ・ワレサの業績を承認し、彼に対する党宣機関の1年にわたる中傷キャンペーンを否定するものである。

ポーランド社会にとって、この決定は、

1980年8月に踏み出され、1981年12月13日以降も追求してきた道の正しさと、真実と自由、結社の権利を求める闘いの方法の正しさを確認する。これら根本的諸価値は平和の不可分の要素である。この決定はまた、ヤルゼルスキ政権の挑発と野蛮を国際舞台で断罪するものとしてとりわけ貴重かつ有意義である。これは、新たに緊張の源を作りながらも平和のストーガンをもてあそぶ者を、そして市民の自由を奪っておきながらもこれを平和の条件として西側に暗に認めさせようとする者を断罪する。〔「連帯ニュース」11号より〕

分析と展望 ——獄中よりの手紙

(中)

アダム・ミフニク

Analiza i Perspektywy Adam Michnik
"kultura" nr.7/430 8/431, 1983

【前々号(19号)よりの続き】

ぼくは、支配的地位にいる共産主義者たちがアメリカの政策に怒るのはわかるが、彼らの反応はどうしてあもバカげているのかはわからない。「財産を失うことがあっても理性を失ってはならぬ」——これは50年前にメリヒオル・ヴァンコヴィチがソビエト・ロシアから帰ってきた後に書いた言葉だ。ヤルゼルスキの顧問や演説起草者たちに、この文句をとくと考えるように勧めたい。親愛なる党の同志の方々、いったい君達はアメリカ帝国主義者に何を望んでいるのか? 戒厳令に拍手を送ってほしいのか? 国民感情の正常化を手伝ってほしいのか? アメリカがヤルゼルスキにドルを与え続け、その金で警察を近代化し、新しい刑務所を建てられるようにしてほしいのか? 冗談はよしてくれ、同志たちよ! もう一度カダルと彼の政策をよく見直してほしい。カダルはいかにしてアメリカの制裁をやりすごし、国際戦略の変化から自國に成果をもたらしたか? 新しいアメリカの政策の起源はデタントの崩壊に求めねばならない。70年代末にはすでに、デタントという政策路線は効果がないことが明らかになっていた。イランでの出来事やアフガニスタン事件は、アメリカの見解をはっきり裏付けるものだった。モスクワ・オリンピックのボイコットとレーガンの大統領当選は、アメリカの政策の根本的再編成の証拠だった。デタントの時代は去ったのだ。米人専門家の見解によれば、ソ連はアメリカの軍拡制限を利用して、通常兵器戦力に関してはアメリカよりも優位に立った。アメリカを直接攻撃せずに、ロシアたちはアメリカの周縁部にくいくこんだ。少なくともワシントンはそう解釈している。

ポーランドの視点からは、デタントの時期はひとつ大きなチャンスであり、エドワルド・ギエレクは少なくともその一部を利用した。ギエレク

は情勢をたくみに利用した。一番重要なのは、彼が、ポーランドの政策を通じて、アメリカ人に共産主義者が治める国の安定した発展を援助する気にして必要があると理解していた点である。ギエレクは西側からの信用供与をむだ使いしたとよく言われるが、しかしその信用供与を取りつけるのに成功したのがギエレク本人だったのも確かなのだ。ギエレクはまた、西側政治家たちからかなりの評価を受けている。

デタントが体制の寛容の一原因であったことは認めながらも、ポーランドの民主的反対派はデタント政策を批判した。民主的反対派は、西側がよりアクティブに「人権」を擁護するよう求めた。彼らは、「人間の顔をしたデタント」を求めていた。民主的反対派は、デタントが政府同士の接触や通商協定に終わることに警告を発した。この警告は今でも意味を失っていない。今日週刊紙『ポリティカ』のインタビュー記事を読んだ。インタビューを受けていたのはハノーヴァーから来たドイツの役人で、ポーランドの友人であり、ハノーヴァーとポズナンの文化交流のオルガナイザーということだが、これを読んで悲しい思いにとらわれた。ポズナンにはポーランド有数の詩人リシャード・クルニツキがおり、ポーランド有数の優れた劇場である『第八日劇場 Teatr Ósmego Dnia』がある。しかしかれらがドイツからの友人は、こういった種類の文化サークルとの交流を『ポリティカ』の記者に語らなかったようだ。残念なことだ……。

この小さなとえ話を広く拡大して考えることができる。世界中に平和メッセージを送っているアメリカの学者たちは、彼らのイニシアティブについてあの偉大なロシア人学者、ノーベル平和賞受賞者たるアンドレイ・サハロフ博士がどう考えているかに興味があるに違いない……。われわれが知識人に求めるのは専門的政策にとどまらぬ、

それ以上のものだ。

しかしそれはさておきデタント政策に話を戻そう。モスクワ・オリンピックのボイコットは、ポーランドの八月ストライキと時を同じくした。ポーランドの出来事は、国際的緊張緩和を救うチャンスだった。ヘルシンキで作り出されたヨーロッパ平和モデルを搖きぶったのは「連帯」の存在ではなかった。そのモデルは、アフガニスタンへの兄弟的援助とやらによって破壊されていたのだから。「連帯」の誕生は、ヨーロッパおよび世界の緊張緩和の再建を可能にするものだった。ポーランドへの共感と关心は非常に大きく、アメリカ大統領が強硬路線をとろうとしても世論の賛成を得られなかつたろう。レーガン大統領が当初から、彼のいう“悪の帝国”ソ連との対策を望んでいたという前提を受け入れて考えると、ポーランドの戒厳令は全くレーガンに都合良いものだったといえるだろう。

はたしてアメリカ入たちはポーランドとの関係において、理想主義に従い損得勘定ぬきで行動しているだろうか？　スザン・ソンタグなど一部の人はたぶんそうだろう。ソンタグの有名な公的発言はポーランド人に末長く記憶されたたえられ続けよう。しかしロナルド・レーガンは自国の利益という動機に従っている。これは間違いない。ヤルゼルスキはそのことをポーランド国民にわざわざ教えようと無駄な時間を費している。レーガンはポーランドの内戦を望んでいるのか？　ぼくは、この質問のしかたは適当でないと思う。アメリカ大統領にとってはポーランドの出来事はソビエト政治戦略の要素であり、評価もそれに従って下されるのだ。ポーランドは、ソ連の「平和、軍縮」声明の真偽を試す場なのだ。ちょうど今日のソ連指導者がしているように、1981年12月13日以前ポーランドの共産主義者たちは和解の意思を示し、力による抗争解決を行わないと声明していた。もし彼らが、ついに暴力に訴えたとすれば、それは彼らが軍と警察の力で社会の抵抗を



拘留中のA·ミニク

うちくだけると判断したことを意味する。もし「連帯」が共産主義者と同じだけの力を使えたとしたら共産主義者たちは交渉のテーブルで妥協による解決をさぐらねばならなかつたろう。それと同じにアメリカの指導者たちは、妥協による解決を求めるためにクレムリンに対抗しうる力を持っていしたいと望んでいる。このような考えは論理的だし明確だ。この考えを描くがすことができるのは事実だけであり、「おまえたちの国では黒人を虐待しているじゃないか」といった類の反米の叫びではない。ヤルゼルスキが「アメリカの政治家の非難的になる身代りの少年」という役を気に入っていないのはよくわかるが、その役を自分で命じワインバーガー国防長官いうところの「ポーランドの軍服を着たロシアの将軍」の典型像を確たるものにしたのはほかならぬ彼自身だったことを忘れるわけにはいかない。

ワインバーガーのこの評は実に説得力があるが、現実を正確に描写していない。ポーランドの権力エリート内部における複雑な状況やソ連の新聞の特定の言いまわしなどがそれを証している。モスクワはポーランドの現状に満足していないのだ。

※

※

※



1980年8月から81年12月までの間、指導部の和解政策に不満な党活動家たちにより、様々な党内グループが形成された。彼らはひとまとめにして、“ペトン〔コンクリート。強硬派という意味〕”と呼ばれる。最も有名なのは、「カトヴィツェ・フォーラム」、「愛国同盟グルンヴァルト」、週

刊紙『ジェチヴィストシチ〔現実〕』、そしてそれらの周辺に形成されたシンパたちのクラブだろう。党最高指導部の中でこれらのグループをあとおししていたのは、ステファン・オルショフスキ、タデウシュ・グラブスキ、アンジェイ・ジャビンスキ、スタニスワフ・コチョーウェクといった人たちだ。党の歴史の最も暗い部分から靈感を汲み出していたこれらのグループは、党の民主化を要求する党内改革派の「水平構造グループ」と対極をなすものだった。「カトヴィツェ・フォーラム」は1956年のスターリニスト派閥「ナトーリン派」の口調でしゃべったし、「ゲルンヴァルト」と『ジェチヴィストシチ』は1968年の党イデオロギーを引き継いでユダヤ人にボーランドが支配されるというビジョンを持ちだし、このスターリン主義的イデオロギーを反ユダヤ主義で内付けした。〔1968年3月事件の時、当局は反ユダヤ・キャンペーンで事態を乗り切った〕。特に面白いのは、1968年に反ユダヤの旗頭だったミェチスワフ・モチャルが、80年8月以降は昔の仲間から離れる態度をとっていたことだ。それはともかく、強硬派の発言は、ソ連や他の同盟国の党機関紙に書かれる非難ときわめて密接に結びついていた。1981年6月にソ連共産党中央委員会からのすばらしい手紙を受け取った後、ポーランド統一労働者党では、中央委員会総会の席上で公式クーデターの試みがなされた。グラブスキがカニアの第一書記辞任を要求したのである。強硬派はまた、およそあらゆる罪状をあげつらってラコフスキを非難した。ラコフスキは党機構からは“身内”とみなされておらず、ヤルゼルスキと密接な関係がある点だけで評価されていた。強硬派はヤルゼルスキに攻撃をかけることはあえてしなかった。

12月13日の事件は強硬派の診断の正しさを証明した。「連帯」との和解は不可能だと明らかになった。しかし“戒厳令”的導入は同時に強硬派をも麻痺状態に陥れた。そしてクレムリンは、かすかなためらいをみせた後、ヤルゼルスキに祝福を与えた。ポーランド統一労働者党内では“在庫品調べ”がはじまった。「水平構造運動」はきびしく攻撃され、企業や学校内の党組織がいくつも解散させられた。党の県レベル組織内でページが行われた。ほどなくグダンスクとポズナンの第一書記フィッシュバフとスクシプチャクが解任された。



1982年8月31日 ヴロツワフ

この2人はリベラルな考えを持ち、県組織の広い支持をかちていた人物だった。権力を行使し社会との伝導ベルトとなるものとしての党は、存在をやめた。党機構の指導的地位には——國家の指導的地位にも同様に——軍服を着た人々が座った。

党機構内のページは「リベラル派」のみを襲ったわけではなかった。強硬派として知られたジャビンスキ（カトヴィツェ）、コチョーウェク（ワルシャワ）もまた解任された。そしてついに1982年夏には、プロパガンダ担当だったステファン・オルショフスキが中央委員会書記局からはずされた。こうした変化はすべて、軍の権威に守られておりおこなわれた。軍は法と秩序の保証者だった——指導者集団の中での軍の権威は侵しがたかった。しかしながら、強硬派の非法地下新聞は発行されづづけ、ラコフスキ攻撃を続けた。ラコフスキはまたも將軍たちの権威で守ってもらった。ラコフスキの政策は単純なものだ。軍の力と無限の專制を足場に、彼は穏健な政府をつくろうとしたのだ。強硬派はラコフスキ攻撃に際し、“ウルトラ”的な性格を帯びた。ヴィクトル・ユゴーを引けば、「“ウルトラ”たることは、あらゆる一線を越えることである。それは王座の名において王笏を攻撃し、祭壇の名において司教冠を攻撃

すること、自らが背負い運んでいるものを軽蔑すること。それは異端者をあぶる火が弱すぎると焚刑のまきの山を悪罵すること、神性が少なすぎると神をののしこと。それはすぎた要求を満たさぬとして非難すること、法王に法王らしさが足らぬ、王に王らしさが足らぬ、夜に光がありすぎると言うこと。白を求めて、雪花石膏にも雪にも白鳥にも百合の花にもあきたらぬこと。ひとつのことに肩入れするあまり、ついにその敵になってしまふこと、かわいき余って憎き百倍になること」。

強硬派にとって、戒厳令は無邪気な斥候の警告のようにみえた。数千人の逮捕は当局の破滅的リベラリズムの証明であり、改革の継続を宣言したのは危険な修正主義、司教会議との対話は右翼日和見主義と聖職者への屈服のあらわれだった。強硬派が夢見ていたのは、ジェルジンスキーリー流の支配、ユダーノフ流の文化政策、そして社会主義建設の時代に階級闘争激化をテーゼとしたヨシフ・スターリンの明快なイデオロギーに戻ることだった。この視点から見れば、市場経済や西側との貿易を考え、ポロニア〔在外ポーランド人〕企業に寛容な態度を示し、宗教的行列を許すことなど、階級への裏切りそのものでありマルクス=レーニン主義原則の否定なのだ。

※

※

※

しかし、現在の強硬派が全員スターリン的きまり文句に忠誠を誓った騎士たちだといっては間違ひになろう。きまり文句は彼らのイデオロギー的装備なのだ。彼らのメンタリティーはむしろ、強い権力を夢見て果たせず、コンプレックスと外国嫌いにこり固まり、ピューリタン的で残酷で損得感情ぬきに嫉妬深い敗北者のそれに近い。ラコフスキタイプの人間は彼らの目にはリベラリスト知識人、頭でっかちのうじ虫、ずるがしこい出世主義者のいかさま師とうつる。彼ら自身の欲求をぶつける対象とすべきいまわしいものに見えるのだ。彼らの理想とするのはオルショフスキやコチョウエクだ。オルショフスキは容赦ない男で、また抜けめなく自分の原始主義を守っているし、コチョウエクは無色透明で浅薄だが教義に関してもしぶとい男だ。

1982年10月の党中央委員会総会でコチョウエクは、最も危険な側面から指導部の政策を攻撃し

た。彼は、ソ連との経済協力を軽視しているとして指導部を批判したのだ。しばらく前から駐モスクワ大使を務めるコチョウエクはこう言った。「われわれの第1のパートナーであり経済安定化の物質的基盤である国と協力し合意して行かなければ、われわれにはいかなるプランも作ることはできない」。つづいて彼はポーランドのソ連からの借金が増えつづけることにふれ、ポーランドの計画そのものもその計画の規模も、ソ連からの供給の展望にかかっていると言明した。「1980年～81年ににおけるわが国の全体的弱体化、および国際条約の領域でのわが国中央の権威の失墜とによって、われわれはソ連のパートナーたちとの間の協力5カ年議定書にも、また通商5カ年条約にも署名しないという事態に至った」。そして彼は警告する。「これまでにヤルゼルスキ同志がソ連指導部に対して行った報告や発言——経済問題についての具体的な提案も含めて——にソ連側が理解を示してくれたとはいえ、だからといって私がさきに述べた状況をこのまま続けるわけにはいかないのは事実であり、これを隠すことはできない」。「主に西側からの技術輸入でポーランドの立場を改善しようとの賭けは、期待した成果を生まなかつた。それどころか、そのためにコメコン内部でのわが国の立場は悪くなつた」。だから、「メカニズムと手段の面から」計画案を批判せねばならない。「外国貿易のメカニズムと手段のすべてが、もっぱら“第2の支払いゾーン”に振りむけられているようと思われる〔“第2の支払いゾーン”とは、西側との現金取引き貿易のこと〕」。しかし、「前回のコメコン会議での決定によれば、われわれは経済計画上の協力だけでなく全般的経済政策における協力の時期にはいりつつある。(……)私の意見では、閣僚評議会内の経済計画・指導センターの役割を明確化し、計画委員会、外国貿易省その他経済関係省庁の役割を強調しなければならない。(……)外国貿易独占の原則を厳格に守っている国〔ソ連〕との協力の中で、われわれはわが国の外国貿易担当機関の調整機能を強化せねばならない。ソ連の市場に人的潜在力と組織化システムが存在することは、近隣国との協力の実践の中で証明ずみである。改革をこの協力の基本方針に結びつけることは不可欠であり、今こそ行わねばならない。これこそ改革が成功するための条件である。

われわれに必要なのは根本問題の完全な解決であり、空虚な官僚主義反対の呪文でもなければ純粋な市場経済の中身のない贅美でもない。(……)国家の全体を統治する戦略的思考もなしに企業 자체が高い輸出利潤を確保できるという意見は、ユートピアにすぎない。

1970年12月のグディニアの造船労働者虐殺に責任がある男コショーウェクの演説を上のように少しきどいほど引用したのは、ヤルゼルスキの政策に反対する強硬派の綱領のわく組が、かなり以前から作成されていたことを示すためだ。コショーウェクがこの演説に関し事前にモスクワと相談しており、実際のところはモスクワがコショーウェクの口を借りてしゃべったのだと言ってしまってもかまわない。ヤルゼルスキも含めて誰一人、あえてコショーウェクと論争しようとする者はなかった。かわりに、強硬派の綱領に気付かぬふりをするという態度がとられた。だが、強硬派自身にとってコショーウェクの演説は重要なシグナルだった。その後ほどなく、強硬派としての活動がもとで在東ドイツの通商代表部に左遷されたタデウシュ・グラブスキは激しい調子の手紙を書き、指導部の政策を無能かつ無益だと非難した。「眞の共産主義者」グループは活気づいた。1982年12月、党政治局は党内同結と党規を逸脱した党内団体の解消とを呼びかけた。強硬派はこれを無視した。解散したのは結局、党指導部に忠実な党内クラブであるクラクフの『クリニツァ〔鍛冶場〕』だけだった。『ジェチビストシチ』クラブは解散しなかった。それどころか、ポロニアの企業や知識人に対する寛容政策、「投機師」や「社会の寄生虫」などへの攻撃を強めた。ユゼフ・コセツキは社会サイバネティクスに関する自己流の方法論で強硬派に貢献して評判をとった。彼は、[放つておくと]政府をも反対派をも掌中に収めたユダヤーフリーメーソンのマフィアがポーランドを操るようになる、という未来図を描いてみせたのだ。

※

※

※

このコセツキという人物に少し目をとめてみよう。ぼくが彼を知ったのは1964年ごろ、彼は非合法反共産主義組織に参加したかどで宣告された刑期を終えて出てきたばかりだった。彼の共産主義嫌いは非常に激しく、強迫観念的でさえあったの

で、彼はぼくをあろうとか軟弱な骨なしとみなした。70年代初め、それまで物理学者をしていたコセツキはいわゆる社会サイバネティクスに凝りはじめた。要するに秘密結社が世界を陰で操っているとの考え方にもとづいて世界の現象を解明しようということだ。戒厳令が彼を高みに押し上げた。「トリブナ・ルドゥ」は彼のKORについての論文を掲載し、テレビは彼にインタビューして「連帯」に関してしゃべらせた。この間までの執念深い反共主義者は今や新しい役割を見事に理解していた。反革命はつねにくずや泡を表面に運び上げる。ポーランドの軍事クーデターはコセツキを浮かび上がらせた。コセツキが昔から警察の手先だったかどうかなど問題でない(彼の妻にとつては興味ある問題だろうが)。大事なのは、ブルの俗物の思想的伝統に根ざした彼の考え方方が、スターリンの繼承者たちの精神的資質と見事に手を結んでひとつの完成したイデオロギーを形づくったということだ。

しかし、戒厳令が押し上げたのはコセツキだけではない。メンタリティーからいえばコセツキとは対極にあるイエジ・ウルバン〔政府スポーツマン〕も押し上げられた。ウルバンは戒厳令期間中の政府の行為を全世界に向かって説明する役をわりふられた。類まれな才能に恵まれた政治評論家であり、何度もジャーナリスト界のスキャンダルの主役を演じたことがあり、1956年10月政変の時期にはさかんに民主的改革の継続を求める論文を発表していたこの男は、コセツキ同様の奇道をたどってきた——反体制志向からギエレクの弁明係へ、軍政の弾圧に原則的正当性があると示す役割へ。ウルバンが自分のかつての友人たちを攻撃するにあたっては、——ラコフスキとの親交だけでなく——彼のシニズムと独自の思考法の力にあざかる部分が大きい。彼の政治哲学は単純明快、「重要なのは力だ」というものだ。彼は知識人に向かって優しく説明する。「政府はともかくも寛大なものだ、だが君たちが従順にしていなければ政府の方も厳しくならざるをえない」。ウルバンはマルクス＝レーニン主義に関する儀式的お題目には興味がない。“強硬派”的政治評論家たちに特有の曖昧模糊とした弁証法理論構造やコセツキのような執拗なまでの秘密結社追求とは違い、ウルバンは自分の敵に向かって、鞭のひと打



政府スポークスマン
イェジ・ウルバン



ちをくらわせてもやれるんだというデモンストレーションを示すことで満足している。この鞭の哲学者は“強硬派”を嫌っている。戒厳令導入後の数ヵ月間、“強硬派”的発言はウルバンにとって、ヤルゼルスキとラコフスキの路線は中道・稳健な性格を持つものだと言うときの論拠として役立った。“強硬派”をだしにしたこの脅威は知識人の態度を柔軟化させ譲歩へ向かわせた。だがそうしながらウルバンは“強硬派”を軽視していた。ウルバンは“強硬派”やその支持者をこう評した。
「頑固な堅物たち」、「複雑な現実を出来あいの単純なドクトリンにはめこんで考え、政権担当者たちが社会生活を社会主義理念に適合するように直せないので憤激している連中」、「手のこんだ和解・鎮圧路線が破綻するのを待って、自らの望む形の秩序を力によって導入しようと考えている。どんな力でと尋ねてみれば——なぜなら彼らは何の力も持っていないのだから——『労働者の力、階級の力』と答える。うたい文句につられて彼らに従う者など、吹けばとぶほどの少数の勤労者以外に誰もいないのに気がついていない」。

ウルバンは考え違いをしていた。彼は知識人界の抵抗を予想していなかった——だが実際は、「連帶」にムチを与え、創造芸術家組合にアメを差し

出す政策は失敗した。彼はまた、“強硬派”的力をはかりまちがっていた。今年の5月、彼は「熱狂的革命家と公式論マニアたち」について次のように書いた。「彼らもまた今、活動的になっており」、「現指導部の後がまにすわり、和解路線を棚上げにして対決姿勢を強めて勝利を得よう」と望んでいる。戦いを遂行すべき軍団がないことなど気にもかけない。紙の大砲を撃ちこむだけで十分と考えている。この効果十分の発言は、だが、悪いことでも笑って耐えようというのとは違う。ぼくには、“強硬派”が強力な軍団——ソ連——の援助をたのめることがわかるほどウルバンが間抜けているとは思えない。

時々ぼくは、あのソ連の軍団に精神的に近しいのはどちらだろうと考える。原始的で陳腐で頭の悪いコセツキか？ 頭の回転が速く知的でシニカルで道德をふみはずしたウルバンか？ ソ連指導部とソビエト・ドクトリンの司祭たちが支持するのはどちらだろう？ ぼくは、むしろコセツキの方だと思う。ウルバンは自分の考えを実行するかもしれない、ウルバンは道を離れるかもしれない……。

【以下次号】

〔訳：高橋初子〕

KORの4人、「体制転覆準備罪」で起訴

Le Procès du KOR

Solidarność, Bulletin d'Information, No.75, 3.11.83

〔編集部注〕 ワルシャワの軍検察庁は去る9月28日、J・クーロン、A・ミフニク、H・ブエツ、Z・ロマシェフスキの旧KOR指導者4名を「暴力による政府転覆」を準備したとしてワルシャワ軍事裁判所に起訴した。以下、起訴状の主要部分およびこの起訴に抗議する旧KORメンバーと「連帯」ウルスス支部の声明を紹介する。政府スポーツマン、イェジ・ウルバンが10月25日の外国人記者会見で明らかにしたところによれば、現在被告らにより起訴状が閲覧中で、裁判日程は未定であるという。また被告らが西側へ亡命を希望すれば、政府はこれを認めて裁判を中止するつもりという。

なお、同時に捜査が進められていた他のKORメンバー2人のうち、J・リティンスキは逃亡中、J・J・リップスキは病気のため、今回は起訴が見送られたとされている。また類似の容疑で逮捕されている「連帯」指導者7名も近く正式に起訴される予定という。

4人に適用された刑法の各条項は次のように規定している。

第123条 ポーランド人民共和国の独立を損い、その領土の一部を奪い、力によりその体制を転覆し、あるいはその防衛力を弱める目的をもって、他の人間と合意のうえこの目的の達成を目ざす行動を行った者は、5年以上の懲役刑もしくは死刑とする。

第128条1項 第122条、123条、124条1項ないし2項、126条1項および127条に定められた犯罪を準備した者は1年以上10年以内の懲役刑とする。

第14条1項 起訴された者が、犯罪を犯す目的でそのための手段を入手ないし獲得し、情報を集め、あるいは計画を立てた場合、あるいは犯罪を直接犯すことを目的とした行為の実行のための固有の条件を作り出すと考えられる同様の行為を行った場合、さらに犯罪を犯す目的で他人と関係を持った場合、犯罪の準備があったとみなされる。〔訳：水谷驥〕

KORの4人に対する起訴状(主文主要部分)

本職は次の4名を以下の理由により起訴する。

ヤツェク・クーロンは1977年9月から1982年8月までの間、

アダム・ミフニクは1977年9月から1982年8月までの間、

ヘンリク・ヴエツは1977年9月から1981年12月までの間、

ズビゲニエフ・ロマシェフスキは1981年1月から

1982年8月までの間、

ワルシャワおよびポーランドの他の場所そして外国において、体制の力による転覆をめざして、またソ連との同盟関係の破壊によるポーランド人民共和国の防衛力の弱体化をめざして、別個に訴訟が進められている他の者たちと協力の上、これら目的的実現のための準備を行った。

具体的にいえば、



J・クーロン



A・ミフニク



H・ヴエツ



Z・ロマシェフスキ

——被告らは、とりわけ「社会自衛委員会—KOR」や「科学講座協会」、「自治共和国クラブ：自由・公正・独立」、「連帯学生委員会」、「自由労働組合」およびズビグニエフ・ロマシェフスキに関しては主として「自治共和国クラブ」および「地方執行委員会」などの非法の結社および組織の結成を呼びかけ、あるいは自ら結成した。被告らは、これら組織の構成員および同調者の間で、また合法的組織の構成員に対し、ポーランド人民共和国の政治的、経済的利益に打撃を与える行動を広めた。

——被告らは、ポーランド人民共和国の利益に反する組織活動および宣伝、教唆活動に従事し、社会秩序の基本である法的、公的秩序に対し打撃を加えた。

——被告らは、国家の憲法上の諸原則、とりわけポーランド統一労働者党の指導的役割および現在の国家権力機構、ならびに国家機関とその組織の諸権限に対し公然と反対し、他の人々にも同じことをするようそそのかした。

——被告らは、ポーランドのソ連との同盟関係に公然と反対を唱え、ソ連との関係の再検討と限定化を要求し、社会のさまざまな場所において反ソ感情を広めた。

——被告らは、ポーランド人民共和国に反対する

活動を展開する外国センター、とりわけ「ヨーロッパ自由放送」とパリの「クルトゥーラ」と接触を維持し、これらセンターに祖国に関する情報を提供して援助を与えた。さらに被告らは、これらセンターの財政的援助を受け、ポーランド国家の利益に反する行動を協力して行った。

——被告らは、雑誌などの出版物を組織、刊行、配布し、これらを通じて、現存する政府機関や社会構造に反対し、抵抗運動を作り出し、こうして体制を力によって転覆しポーランド人民共和国の防衛力を弱めるよう呼びかけた。

以上は刑法128条1項および123条に定められた犯罪に相当する。

……

以上に示された彼らの行動により、被告らが刑法123条により定められた犯罪を準備した（第128条1項および第14条1項）ことは明白である。このことは、証言や文書、司法鑑定、専門家の見解等、予審で集められた証拠により証明されている。

……

以上により、この起訴には十分な根拠があると考えられるべきである。

ワルシャワ、1983年9月27日

軍検察庁検事

大佐 ヴォジミェシ・クバラ

4人の起訴に抗議する——KORメンバーの宣言

ヤツエク・クーロン、アダム・ミフニク、ズビグニエフ・ロマシェフスキ、ヘンリク・ヴエツの4人に対する起訴状がワルシャワ軍事裁判所に提出された。彼らは刑法123条および128条1項に定

められた犯罪、すなわちポーランド人民共和国の体制の力による転覆を準備したという罪に問われている。

われわれはここにあらためて被告たちとの全面

的な連帯を表明するものである。われわれは彼らと共に労働者防衛委員会——その後社会自衛委員会=KORに改組された——に所属し、公然周知のものだったわれわれの共同行動に対し共同責任を負っている。この行動の原則は、政治闘争の手段としての暴力の行使を拒否することにあった。それゆえにわれわれの友人たちは何の根拠もなしに起訴されている。これは過去の悲劇的裁判を想起させる。

ワルシャワ

1983年10月12日

アンジェイ・ツェリンスキ、イエジ・フィツォフスキ、ズビグニエフ・カミンスキ
父、ヴェスワフ・ピオトル・ケチク、アン

カ・コヴァルスカ、エドワルト・リビンスキ、ハリナ・ミコワイスキ、エヴァ・ミレヴィチ、ウォイチ・オニシケヴィチ、アントニ・パイダク、ユゼフ・リビツキ、アニエラ・スタインスペルゴヴァ、マリア・ヴォシェク、ヤン・ジェイイヤ神父

〔仏語版注：以上の署名者は、物故者、および特別の事情により署名が不可能だった以下の人々を除いたKORの全メンバーである。ヤン・リティンスキとヤン・ユゼフ・リプスキ——拘留中。コンラド・ビエリンスキ、アントニ・マチャレヴィチ、ユゼフ・シレニオフスキ、ボグダン・ボルセヴィチ——地下潜行中。そして海外滞在中の人たち。〕

KORの4人に連帯する——「連帯」ウルスス支部の声明

ウルススの労働者と市民諸君！

KORの創設者と活動家、そして独立自治労働組合「連帯」の指導者に対する裁判が近く始まろうとしている。彼らに向けられた罪状は同時に、わが組合全体おおよびあらゆる独立諸組織に対するものである。それは連帯の理想とボーランド愛国主義に対する侮辱である。ウルスス機械製造工場の労働者には自らの怒りを表明すべき特別の理由がある。なぜなら、KORが創設されたのは、まさにわれわれを守るために、中傷され迫害されたこの「山師ども」を守るためにだったからである。われわれの多くが物質的、法的援助を受けた。「連帯」として実を結ぶことになる最初の独立労働組合が結成されたのもKORのイニシアティブによるものであった。

まさにこのためにわれわれは今、正義と連帯を大切にしなければならない。労働者の大義の防衛のために、自らの知識を活用し、自らの職と家庭の平和と個人的自由を犠牲にした人々を、軍と党に導かれた体制が犯罪者呼ばわりしようとしている今こそ！ 1981年12月13日の夜、仕事を終えて休息していた時、彼らは逮捕され、現実生活から引き離された。特赦は彼らには適用されなかった。戦争状態布告によって定められたこの限定的法令

は彼らには無関係である。

重い病気にかかっていたヤツェク・クーロン、セヴェリン・ヤヴォルスキ、アンジェイ・グヴィアズダ、そしてマリアン・ユルチクは、一切の医療援助を拒否された。彼らは特別扱いを要求せず、テレビに登場しようとせず、亡命の機会を利用しようともしない……。

ウルススのすべての労働者、その家族、そして青年たちに呼びかける。裁判が開始されればただちに裁判所の前に集まり、この良心の囚人たちに道義的支持を表明しよう。裁判が始まる日、各自の工場や居住区で抗議の意志表示をしよう。こうして、1976年に受けた恩義を、そのごく一部分でもよいから返すのだ。

以前のように、午後7時30分のテレビ・ニュースの時間、手にロウソクや懐中電燈を持って散歩に出よう。こうしてわれわれが、人々の共感を求め、兄弟愛の感謝に心が燃えていることを示すのだ。灯りをいただいたこの行進の締めくくりとして聖ユゼフ教会でともに祈ろう。

1983年10月2日

「連帯」ウルスス機械製造工場支部

ポーランド日誌 1983年10月

10月2日 2日間にわたって開かれていたポーランドの弁護士会の大会がKORや「連帯」の人々を含む政治犯の釈放などを要求して閉会する。

10月3日 西側政府代表団はポーランドの対西側債務返済計画繰り延べのため現地調査团を派遣する。ワルシャワの日刊紙『ジヂェ・ワルシャヴィ』によると、83年前半、物価は30パーセント、賃金は約29パーセントそれぞれ上昇したという。

10月5日 ワレサ、83年度ノーベル平和賞受賞。ポーランド・テレビ、地下活動をやめて自首してきた者は370人にのぼると伝える。その中でポーランド政府当局は、「10月10日が近づくにつれ（10月10日は恩赦法による無差別保証期間が終わる日）、地下活動をやめて出てくる者の数は増加するだろう」と語る。

10月6日 ポーランド国営通信PAP、ノーベル賞委員会の決定は内政干渉であるとする長い論評を報道。対ポーランド債権国代表団は4日間の訪問を終えワルシャワを発つ。ジェシュフのカトリック知識人クラブ（KK）が政府当局により解散させられる。

10月7日 ワルシャワの「連帯」指導者ズビグニエフ・ブヤク、「ノーベル平和賞はワレサへの贈り物ではあるが、投獄されている人々、裁判にかけられている人々、抑圧や迫害の犠牲者、そして名もない多くの「連帯」活動家たちへの贈り物でもある」と表明する。

10月8日 ソ連政府機関紙『イズヴェスチャ』はワレサに関してノーベル平和賞には触れず、ポーランドのテレビ番組「マニー」を引用する形で、「ワレサは100万ドルを含む財産をたくわえている」との記事を掲載。「トリブナ・ルドゥ」、KORの「反ポーランド的、反国民的な、外国に鼓舞された役割」を非難する記事を掲載。

10月9日 ワレサがふだん礼拝しているグダンスクの聖プリギッダ教会に1万人近くの人々が集まり、ワレサを讃える。

10月10日 82年12月に逮捕されるまでTKKのメンバーとして活動していたヤヌシ・パウビツキに4年の禁固刑。7月の恩赦法により2年に減刑される。

10月11日 ポーランド人民軍の40周年記念式典がワルシャワで開かれる。ウルバンは定例記者会見でワレサのノーベル賞受賞、新労組、来年の物価値上げ、政治犯の裁判や調査などについて語る。新労組は1万7000に達し、350万人にのぼっているという。8月19日に解

散させられたポーランド作家組合に代わる新組織が正式に認可される。この日ポーランド政府は駐ポーランド・ノルウェー大使に対し、レフ・ワレサに対するノーベル平和賞の授与はポーランドに対する内政干渉であり、両国関係に重大な結果をもたらすと正式に抗議。ノルウェー首相は抗議は賢明でないと語る。

10月12日 KORのうち15人のメンバーがKORの4人の起訴に抗議する声明に署名（本誌21、22頁参照）。ワルシャワ・ラジオによれば新労組は1万8000を超えて、約350万人に達しているという。

10月13日 ノヴァフタで私服警察官に射殺されたボグダン・ヴォシク1副忌のミサに数千人が参列し、その後約1000人が街頭を行進、警察の催涙ガスにより解散させられる。グダンスクの聖プリギッダ教会の司祭でワレサの友人でもあるヘンリク・ヤンコフスキ神父に対し「反国家的行為」による調査が開始されたという。ポーランド国有鉄道付属労働者宿泊所の料金が10倍に引き上げられる。

10月14日 2日間にわたりポーランド統一労働者党中央委員会が開会。20年来はじめてイデオロギー問題を討議する予定。ポーランド・テレビによると、10月12日までに407人が地下活動をやめて自首してきたという。

10月18日 ヘンリク・ヤンコフスキ神父、検察局への出頭を命じられる。建物の外でL・ワレサら数百人が神父が出てくるのを待つ。この間「連帯」のスローガンが叫けられ、讃美歌が歌われる。

10月19日 ソ連首相チーホノフとヤルゼルスキが東ベルリンで会談し、短期、長期にわたる経済計画の調整に合意。

10月20日 ワレサはノルウェー紙とのインタビューで、「友人たちが獄中にいるかぎり、私は授賞式のためにノルウェーに行くことはできない」、「ポーランドにとどまり、逮捕された仲間たちのために闘うのが私の義務である」と語る。西側特派員に届いた声明の中で、ズビグニエフ・ブヤクはTKKの5人目のメンバーとしてコンラト・ビエリンスキを加えることを提案する。彼は81年にKORが自主解散するまでそのメンバーであった。ワルシャワでラジオ「連帯」の放送が約5分間あり、その中でブヤクが、ワレサのノーベル平和賞受賞を讃えるとともに、KORの4人と「連帯」の7人に対する裁判が開始されれば、文化行事を3日間ボイコットするよう呼びかける。

10月22日 計画委員会副議長のS・ドゥゴシは「トリブナ・ルドゥ」のインタビューで「西側による制裁がポーランド経済に与えた損害の詳細がまもなくまとま

るであろう」と語る。政府経済改革委員会のW・バカ教授によれば、1983年の生産増加率は計画1.7パーセントを大幅に上回って6.5パーセントになるという。

10月24日 グダンスクのレーニン造船所の工場長が「テクノクラート的、権威主義的経営方式と経済問題解決の失敗」を理由に解任されたことが明るみに。

10月25日 ウルバンは定期記者会見で500人が地下活動を放棄し、恩赦の適用を受けたことを明らかにする。ワレサ、80年度ノーベル文学賞を受けたボーランドの詩人チエスツワフ・ミウォシュを通じ、パリでのノーベル賞受賞者の会合に送ったメッセージの中で、「すべての政治犯が釈放されるようボーランド政府に圧力をかけてほしい」、「国際的な圧力が政府と人民との対話を再開させる助けとなる」と述べる。

10月27日 25日からボーランドを訪問していたハンガリーのカダル首相ら代表団が帰国。カダル首相は、「無政府主義を阻止し社会主義的発展の道を踏み出した」としてヤルゼルスキを称賛。ボーランド国民銀行副総裁によると、83年の賃金上昇率は28.5パーセント、また物価の上昇率は25パーセントになりそうだという。

10月28日 ウルバンの語ったところによると、政府はKORの4人と「連帯」の7人について、少なくとも「完全な安定」が回復されるまで西側に住むことに同意すれば、身柄釈放の用意があることを明らかにする。TKKは声明を発表し、政府が恩赦期限の切れる10月31日を「連帯」壊滅の日にしようとしていると述べ、また政治犯防衛のため、ビラ宣伝、デモ、共同請願など、さまざまな形で連続した抵抗行動を行うよう呼びかける。ヤヌシ・オボドフスキ副首相は記者会見で84年度経済計画を発表。それによると国民所得3.5パーセント増、工業生産4.5-5.5パーセント増、農業生産

1.4-1.8パーセント増、市場供給量7パーセント増、貨金17パーセント増、物価15パーセント増になり、西側との貿易黒字は20億ドルになるという。内務相、この日までに536人の「政治的非合法活動に従事していた者たち」が投降したと語る。

10月29日 TKKはすべての政治犯の釈放を要求するキャンペーンを呼びかける。パリに集まつた13人のノーベル賞受賞者がボーランド政府に対し全政治犯の釈放を要求する。

10月30日 バター、あぶら身、マーガリンの配給制が11月1から「しばらくの間」再び始まる。

10月31日 70年にシチエン造船所労働者が殺された記念日であるこの日、経営者、党、国家再生爱国運動(PRON)、新労組のそれぞれの代表者が「連帯」時代に建てられた記念碑の下に花束をささげる。

(編:鶴崎公敏)

特製「連帯」カレンダー頒布のお知らせ

1984年度「連帯」カレンダーを頒布します(限定100部)。ブリュッセルの「連帯」在外調整局の製作になるもので、ボーランド現地の「連帯」の諸活動および諸事件をテーマとした美しい写真で構成されています。大きさ=44cm×60cm。定価1500円(会員は2割引)、郵送手数料500円。郵便振替か現金にて事務局までお申しつけ下さい。先着順に受け付けます。申し込みは、部数が少ないため1人1部に限らせていただきます。

編集後記

☆今日のボーランドにおいて12月は2つの記憶が人々の心深くをつき動かします。いうまでもなく、1970年12月事件と81年12月13日(=戒厳令布告)です。1970年12月事件は80年8月以降の「連帯」の運動を準備し、そして81年12月13日は次の飛躍へむけた準備をボーランド人に強制しました。その12月が今年もまたやってきました。ふたつの12月の記念日、13日と16日をボーランドの人々がどのように迎えるのか、

しばらく外電に注目したいと考えます。

☆本誌創刊号が出たのが1981年1月18日、それ以来ほぼ月刊ベースを維持して今日にいたりました。これまで来れたのも会員・読者の方々の絶大なご援助とご協力の結果と、心から感謝しています。3年目にに入る次号から少し装いを改め、内容にもさらに工夫をこらしたいと考えています。今後とも旧に倍してご協力、ご援助のほど、よろしくお願いします。

1983年11月24日 (み)

発行所・ボーランド資料センター

Center for Polish Research % Kazukuni Bldg. 3F 2-10-5 Misakicho Chiyoda-ku Tokyo 101
東京都千代田区三崎町2-10-5 一国ビル3F
電話 03-261-2585 郵便振替 東京 2-81069
定価400円・年間定期購読料5000円(送料込)